

れど、御傘いさゝかかたぶかす、御衣をもぬらさせ玉はざりしかば、見る人その御力量のほどを感じける。

〔浚明院殿御實紀附録^二〕織田甚助信節後納戸書、まだ年わかゝりしころ、紅葉山へ詣させ玉ふ御供にまかりしが、唐門を出させたまふころにはかに村雨降ければ、甚助長柄の御傘を進らするとして、あやまちて御肩にあてしかば、大に恐懼して、かへらせ玉ひしのち、下部屋にこもり居たり、おなじ御供にまかりつる人々も、いかなる御答あるべきかと、心うくおもひ居けるに、甚助何故御前に出ざるや、もし病にても有やと問せ玉ひしかば、小納戸頭取某答へ奉りしは、甚助今朝紅葉山にて、御長柄奉りしに、御肩にあてしと覺え候へば、御氣色をはゝかりつゝ、しみ居候よし申上ければ、仰に甚助としわかければ、ことにのぞみ氣おくれて、思ひあやまちたるならん、今朝長柄は唐門の柱にあたりしに、それを我肩とおぼえしや、わかき時はさなるあやまちは、幾度もあるものなり、とくめし出せよとのたまひしかば、そのよし傳へて、甚助直に御前に出て、給事し奉りけるとなむ。

〔嬉遊笑覽^二器用^中〕古き畫卷物などに見えたるは更なり、後世貞享元祿の始までも、雨がさ、日傘、大人小兒をもに皆長柄也余喜多村信節が家にも、この諸國咄^{真享二}幼き女兒をいふに、乳母腰もとつきて、入目をよける傘さしかけて行云々、其畫も長柄なり、又むかし説經師長き傘をさしたり、一雪が獨吟に、寛文元年江戸にて法の師のかたぐ傘月のかさ、後の彼岸にとく辻談義、また古き畫に、大路にて食物など賣もの傘さしたり、宗因千句寛文六年我家はから笠の下天が下すくなる道をおこし、飴うり、飴屋が傘は今に遣れり、

〔異本洞房語園^{補遺}〕元吉原にては、雨の降時、遊女の揚屋へ通ふには、男共に負れたり、略中後より長柄の傘をさしかける體、中々品よく見しとなり、